URV 研修報告書

広島大学
医学部保健学科看護学専攻

角谷　麻里奈

・スペインのナショナル・ヘルス・サービスについて

スペインでは、100%の住民に、健康や QOL の維持・向上をサポートするための医療等のサービスが提供されている。サービスの詳細な内容については自治体によって異なっている。

カタルーニャ州では、生まれたばかりの乳児や幼児から高齢者までの全ての発達段階の住民がカードを所持している。このカードは、日本でいうところの保険証と類似していると考えられる。

カタルーニャ州のヘルス・サービスの重要ポイントとしては、労働者への支援に力を入れており、専門家がそれぞれの専門性を発揮できるよう、1 つの職場に留まらせずに就労できるように支援している点である。

・看護学における教育制度について

URV では、1 単位は 25 時間で取得できると規定されている。25 時間の内訳としては 10 時間が大学での講義・演習等、15 時間が自宅学習となっている。ここでいう、自宅学習とは講義等で出された課題をこなしたり、予習・復習などの自己学習を行ったりする時間のことである。

URV で学士の学位を取得するためには、240 単位を取得することが必要である。日本と同様で 4 年制である。看護学だけでなく、理学療法学や作業療法学を専攻している学生についても同じである。日本の大学の卒業所要単位数と比較すると、約 100 単位以上多く取得しなければならないため、日本の学生よりはるかに学習時間が多く、質が高く、より実践的な教養や知識、技術等を獲得できるといえる。また、修士の学位を取得するためには 60 単位を取得しなければならず、学士と同様に、日本の学生よりも学生生活の多くを学習・研究時間に費やし、より専門的な知識を身に付けることができると考えられる。

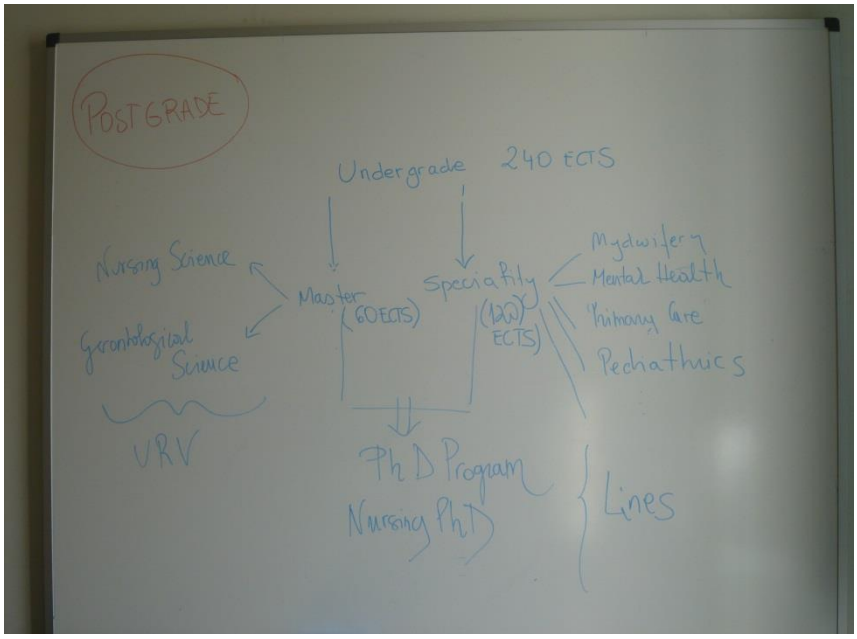
EU 加盟国内の大学を卒業すると、EU 加盟国なら卒業した大学の所在国以外の国でも就労できるシステムが整えられている。そのため、EU 加盟国では共通の教育システムが導入されている。EU 全体では、卒業所要単位数は 180 単位と規定されている。

URV の看護学部では過去 3 年間、卒業後、スペイン内で看護師になった人はいない。しかし、看護師として就職していないのではなく、EU 加盟国である他国で就職しているということである。希望すれば、EU 加盟国内で臨床実習を受けることが可能である。他国で臨床実習を受けたり、就職したりするためには、国によって公用語が異なるため、就職したい国の公用語や英語における語学力を、職場で使えるレベルに磨き上げておく必要があるといえる。

国外の EU 加盟国で就職できるよう、語学力の向上を目指した英語での講義も行われている。この講義に参加させていただいたところ、対象学年は 2 年生で、選択制の科目であった。2 年生を対象としているということもあり、専門知識、英語を含めた講義内容は比較

的、易しく、外傷における処置についての専門知識を英語で確認するといった内容であり、ワークシートを用いて行われた。

助産師の資格を取得するためには、大学で 4 年間かけて学習した後、専門家としての学習を大学院で 2 年間行い、単位を取得しなければならない。また、スペインでは、日本の学校のように保健室に養護教諭が駐在しているのではなく、看護師の資格を所有したスクールナース(プライマリー・ヘルスケア・センターの看護師)が週 1 回、学校を訪問している。このスクールナースの資格を取得するためには、看護師の資格に加え、大学院でプライマリー・ケアを専攻する必要がある。専門家コースは 6 つある。研究者コースは別にあり、博士号には MASTER と PhD(専門看護師)がある。



PhD は 1 年間かけて MASTER の学位を取得していなければ、取得することはできない。

このように、病院やプライマリー・ヘルスケア・センター等の働く施設や求められている役割・機能によって、看護師といっても職種内容が異なるため、学生は就職したい施設や専攻したい分野等を明確にし、目指している専門家の領域に特化した専門性を習得しなければならない。また、日本と違って、単位毎に学費を支払っており、人によって学習したい内容や量等が異なるため、それらによって卒業にかかる年数も異なっていることを知った。

私は研修期間中に少しの時間ではあったが、URV の看護学生(2 年生)と交流する機会を得ることができた。その際に、URV の学生に私が 4 年生であることを伝えるとすぐに、「何の専門家になる予定なのか」といった内容の質問を受け、戸惑った。日本で看護師として働く場合、新人のときから専門看護師や認定看護師の資格取得について考えている人は多くない上に、専門家としてではなく、ある診療科に配属され、ローテーションするなどして様々な診療科で経験を積む場合が多いので、URV の学生のような発想を持っておらず、日本の看護師について説明することが難しかった。2 年生である彼女たちは何を専門にしたいかをある程度決めているようだった。自分たちが何の専門家として将来働きたいかという看護師としての方向性を明確にできているからこそ、向上心をもって学習に取り組むことができているのではないかと感じた。さらに、専門家として特に必要な知識・技術等が明らかになっているからこそ、より専門的な学習・演習を行うことができ、卒業後、早期から病院等で実践力を発揮することが可能となっていると考えられる。日本では演習や実

習での技術練習が不十分であり、卒業後に時間をかけて研修を行わなくては患者に対して技術を提供することができないため、実践力をつけて卒業できるスペインの制度は見習うべき点であると思った。大学生のうちから専門性について考え、専門的な学習を進めていくことについては、スペインの学生の志の高さを感じたが、あらゆる診療科や発達段階の患者を看る力をつけておくことも必要であり、日本の制度と比べ、どちらの方が良いと決めつけてしまうことはできない。

URV の演習室では一度に 20 人の学生が技術練習等を実施することができる。スペインでは、日本では医師が行う、動脈血採血や頸静脈カテーテルの挿入を看護師が行っている。そのため、これらの技術についても練習する必要があり、演習室には動脈血採血の練習を行えるサンプルがあった。

動脈血・静脈血を含めた、採血や輸血の技術練習は大学の教員と共に実施する点は日本と同じである。

・プライマリー・ヘルスケア・センター(PHCC)について

PHCC を見学させていただいた。入り口に「Hospital」と表示されていたが、実際には病院ではなく、診療所としての役割を担っている。PHCC には医師と看護師が常駐している。医師は総合診療を行うために大学でトレーニングを受けた専門医である。理学療法士や作業療法士といったリハビリテーションにおける専門家は主に病院や Nursing home での役割が大きいと聞いた。薬剤師はいないため、薬剤の管理は看護師が行っている。患者や看護師等が薬剤を盗むことがあるため、薬剤名や個数は定期的に確認している。

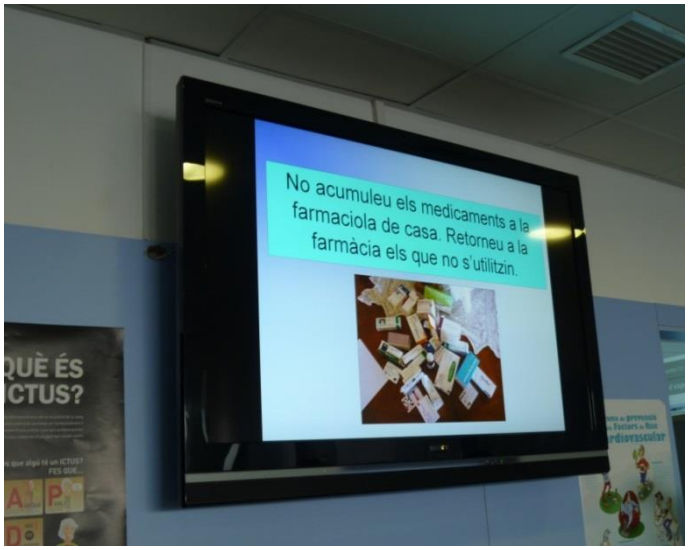
カタルーニャ州の人口約 33500 人全員が見学させていただいた PHCC に登録されており、カードを所持している。他の PHCC は利用できないようだ。カタルーニャ州民は普段、健康に関して何か問題がある際はこちらの PHCC で診察を受け、さらに専門的な治療が必要な場合に病院を紹介してもらうなどして治療を進めることになっている。特に、PHCC での診察は公的に無償で受けることができ、移民や旅行者についても同じである点が特徴的である。移民や旅行者等については言語が異なっていると対応が困難ではないかと疑問に思っていたが、言語が異なっていても通訳の人を雇うため、診療に支障はないと PHCC のディレクター看護師さんが話しており、人種や言語に関係なく、健康に問題を抱えている人に公平に医療を提供しようとする姿勢に感銘を受けた。しかし、PHCC では診察までに待ち時間がかかることもあるため、患者が全額負担することにはなるが、私立の診療所や薬局に赴く場合もあるようだが、多くの州民等は公的な PHCC を利用している。高齢者や移民の対応、学校への訪問(スクールナース)、コミュニティなどの役割がある。旅行者の傷病にも対応している。また、糖尿病や COPD,メタボリック・シンドローム、高血圧といった慢性疾患や生活習慣病の発症・進行の予防も行っている。

医療スタッフは公的な施設で業務を行うため、スタッフの技術・能力の質の保障がされており、無償で診察を受けられる分、症例数が多いため、技術の向上を図ることができる

といえる。

驚いたのは、看護師が受付で診察を希望している患者から情報を収集し、診察・治療の所要時間をアセスメントしていることである。さらに、急患の対応・受け入れができるように、迅速に対応できる医師を必ず設置してタイムスケジュールを管理している。看護師は受付で患者から情報収集し、医師の診察・治療が必要か否かを判断し、医師と相談して不要な場合は看護師がガイドラインに沿って処置を行っている。包帯の巻き方についてもプロトコールがあった。ガイドラインやプロトコールの使用を徹底し、看護師は個々によって能力や技術の差を出さず、安心・安全な対処を患者に行えるよう、日々、技術の向上を図っているのだと思う。次回の診察の時期や対処内容等については全てガイドラインに沿って決められている。多く場合、患者の状態に著しい変化がみられない際、医師は年に 1 回の診察で 1 年分の処方箋を出すため、患者は 1 ヶ月毎に薬局で薬剤を処方してもらい、看護師から教育を受けるため、患者にとっても医療スタッフにとっても必要以上に診察・対処に時間をかけなくて良いシステムになっており、合理的である。

電子カルテはカタルーニャ州で共通の項目を使用しており、PHCC における患者情報は、患者が所持しているカードに保存するため、カタルーニャ州内の病院であれば、どこでも患者情報を瞬時に把握することが可能であり、迅速な対応に役立っている。



PHCC の待合室には左図のようなスクリーンが設置してあり、患者に向けた情報を提供している。画面は数秒毎に切り替わって様々な内容の情報が発信されている。日本でも壁等に啓発等のポスターが掲示されているのを目にするが、このように待合室での待ち時間を有効に活用し、患者にとっても関心の高い内容を示すことは、患者教育において効果的な策であるといえる。

・病院について

公的な病院を見学させていただいた。こちらの病院の理念は「受診のしやすさ、迅速さ、質の保障」であり、院内スタッフ全員が患者の教育者であり、健康を支援する者であるという意識をもって業務に取り組んでいる。

電子カルテには患者に必要なケアの実施項目があり、実施後にチェックを入れて他のスタッフと共有できるようになっている。患者の置かれている状況や今後を把握・判断するために必要であり、スタッフそれぞれが患者のために次に行うべきことを理解することが

できるシステムであるといえる。

看護師が使用していたカートが日本のものと比べると大きくて作業がしやすい上に緊急時に対応できるだけの物品が揃っており、移動時には不便な場合もあると思うが、万能なカートだった。

・Nursing home について

日本でいう介護老人福祉施設を見学させていただいた。医師、看護師、理学療法士・作業療法士が勤務している。PHCC 同様に薬剤師はいないため、薬剤の管理は看護師が行っている。医師は平日の 8 時～17 時までの勤務であり、土日祝日は休みのため、必要時に電話で要請することになっている。介護職者はいないため、看護師は 24 時間体制で療養者のケアを行っている。

こちらの施設は公的で、療養者は無償で入所・生活することができる。しかし、実際には療養者 1 人当たり、1 ヶ月で 1800 ユーロかかっている。これは日本の介護老人福祉施設とほぼ同額の費用がかかっているといえるが、公的な施設なので、療養者の自己負担が一切ないという点が大きく異なっている。

一方で、スペインでは、Nursing　home は、家族等に介護を担ってくれる人がいない高齢者が入所する施設であり、姨捨山のように捉えている人も少なくない。そのため、Nursing home に入所していることは恥であると感じている高齢者もいる。そのため、日本では介護老人福祉施設等の施設に入所を希望していてもすぐに入所できずに待機している療養者は多いが、スペインでは無償で入所できるにも関わらず、待機者がいないと考えられる。

日本の介護老人福祉施設等と比べ、施設内の床が滑りやすそうで、転倒すると痛そうな材質だった。高齢者が利用する施設であるのになぜそのような材質の床にしているのかを尋ねたところ、滑りやすそうであり、実際に転倒すると硬くて痛いことから、療養者は体験することで、滑らないように歩く努力をするようになるため、転倒予防に効果的であると話しており、発想の違いを感じた。言われてみると、施設内には多くの手すりや椅子が設置されてあり、療養者が自力で歩行できるよう、スタッフが間接的にサポートしていることがわかった。

右図はある療養者が必要な薬剤・量を適切な時期に内服できるように 1 週間分、日付と内服の時期毎に用意されているものである。この工夫はこちらの施設が導入している方法であり、カタルーニャ州やスペインにおいて共通の方法ではないようだが、内服が済んでいるか否かを確認しやすく、便利である。日本では内服の時期毎に個包装している所が多いが、1 週間分が 1 シートになっている方がより確認しやすく、内服間違えを防ぎやすい。スペインでは、日本の方法よりも合理的で便利な方法が多くあり、非常に参考になった。

・最後に

今回の研修では、スペインにおける看護だけでなく、リハビリテーションや、社会保障制度、各医療・福祉施設等の役割・機能、教育制度などについて多岐にわたって学習することができた。

本報告書は学習した内容において特に日本と異なっていた点や感銘を受けた点に絞って作成したが、実際には非常に多くの事柄を学習し、見学させていただいた。日本と異なる点が多く、スペインに見習うべき点もたくさんあると感じたが、一方、スペインの諸制度等の良さをそのまま日本に適用するのではなく、日本の国民性や社会の現状等を踏まえ、日本に合った諸制度を整えていく必要性を感じた。

語学力が乏しく、説明を満足に理解できなかったり、質問したいことを英語で表現できなかったりと、悔しい思いも経験したが、今回の経験によって、語学力の向上を図りたいという意識をもてるようになり、日常において、感じたこと・考えたことを英語で表現するとどのようになるのだろうかと考えることが多くなった。

研修を通し、これまで未知だったスペインの諸制度等について知り、実際に見学することができ、日本の看護や社会保障制度などについて見つめ直すことができた。就職後は自分の現状に満足することなく、向上心をもって勉強を続けながら、患者が求めていることを理解し、ニーズを実現させるために必要な工夫を、患者・その家族、他のスタッフと連携して行える看護師になりたい。